

## 例会抄録

昭和二十六年のBCG論争

— 武見太郎と日本学術会議 —

渡部 幹夫

昭和二十六年三月三十一日可決成立、四月一日より施行された結核予防法の成立の時に、その後一年間に及ぶ国民的なBCG論争がおこった。五十三年を経過して結核予防法が改正された今日、現在の医学的知識により当時の論争を検討すると興味深い内容であったことがわかる。しかしこの、BCG論争についてはこの五十年間、結核医療と行政の間ではほとんどとりあげることがなく現在に至っている。BCG論争が医学的には結論の出にくいところを論点としており、政治的な決着にて終結していることがそのひとつの理由である。この論争がきっかけとなり結成されたBCG接種研究協議会により、日本のBCGが世界的には特殊な方法でおこなわれるようになり、比較的副反応や合併症の少ない方法となったことがその理由とも考えられる。BCG論争において結核予防法によるBCGの強制接種に反対の論陣をはった武見太郎と日本学術会議についてその背景を考察した。

武見太郎は日本医師会副会長をGHQとの対立により辞任したのち、社会保障制度審議会委員として、成立以前の結核予防法を知ることが出来る立場にあった。参議院厚生委員会

には参考人として出席し意見を述べている。それに先立ち、文藝春秋昭和二十六年四月号(三月発売と思われる)に『結核撲滅策の撲滅—これは他人事の話題ではない—』を著している。小見出しは次のようなものからなる。「国民的運命を賭ける問題・結核菌は追放できない・消費された国家予算・結核問題の核心・過大評価されたBCG・療養所医療の現実・寒心に耐えぬ保健所・社会保障制度の行方」。その内容は戦前からの結核対策の保健医療行政の批判、厚生行政の批判である。学術的には乾燥BCGワクチンの有効性への疑問と、副反応の強いワクチンの法による強制接種に対する反対意見である。この論文に対して、参議院厚生委員会と同じく参考人として意見を述べた結核予防会結核研究所長の隈部英雄が、文藝春秋の五月号で『結核撲滅策の撲滅』を反駁する—問題の結核論争、主として学問的立場から武見太郎氏へ—を著した。内容は「悪罵をやめよ・決定意見はまだ早い・流行を追う無定見」からなる。しかし、学術的に武見の論点を打ち破っているようには読み取れない。

当時、国際的な結核病の学界においては、アメリカのマイヤーのBCG無効論や、フランスのゲランのBCG無効発言もあった。BCGの強制的接種に対しては、日本学術会議の有志から厚生大臣に対して、反対の申し入れが、法の成立後にあった。新任の厚生大臣橋本龍伍の見直し発言もあり論争は次年度予算にかかわる政治問題化した。しかしBCGの接種はGHQの「BCGの強制は必要」の見解により推しすすめられた。

法案の制定にかかわったと考えられる結核予防審議会の委員の中には、学術会議の反対意見に加わった有志委員もあり複雑な論争となった。橋本厚生大臣は「BCG強制接種を続ける、BCGは有効無害である」との発言を残して厚生大臣を辞任をした。論争は終結し、強制接種は残ったが、その後結成されたBCG接種研究協議会の「BCG経皮接種に関する研究」が、わが国のBCGを安全なものに改善したと思われる。結核予防法成立期の論争の背景には、当時の社会保障政策の方向性に関する国民的議論と、政治と経済理論の対立の構図が一部見て取れる。今後の社会保障制度の再構築に当たり、占領期に形成された政策の再検討が必要であると考えられる。それに関わる、結核行政と社会についての歴史研究の一部を報告した。

(平成十六年十一月例会)

アーチボルド・ガロッドのパラダイム

—— 先天代謝異常症の歴史

深瀬 泰巨

一九〇八年にアーチボルド・ガロッドはロンドン王立内科学会でおこなったクルーン講義において、白皮症、アルカプトン尿症、チスチン尿症、五単糖尿症の四疾患について遺伝学と生化学との接点からその発症のメカニズムについて言及

した。このときにはじめて inborn errors of metabolism という新しい概念を提唱し、それにもとづいてこの新しい術語を披露した。これこそ新しい学問である先天代謝異常学誕生の瞬間といつていいであろう。

ロンドン王立内科学会では先人の業績を記念して、その名にふさわしい業績を上げた研究者に講演を依頼する制度がある。ハーヴェイ講義、ラムレイ講義などとならんで、クルーン講義である。これらの講演を依頼されることは、会員にとつてこの上ない名誉とされており、このような総説的な講演をおこなうためには、それまでに蓄積された広範な研究の成果と、該博な知識があつてのことであることはいままでもない。

これら四疾患は、実はガロッドが最初に発見したものである。すでに発見されていた疾患にたいして新しい視点から考察をくわえたところにかれの偉大さがあるといえよう。

一八八〇年代のガロッドの論文には臨床医学に関するものがおおく、なかでもリウマチ性関節炎や痛風、リウマチ熱と舞蹈病との関連を追究した論文がみられ、その後一八九二年にロンドン小児病院の医師になつてから尿中へマトポルフィンについて注目し、このことから尿中の色素について興味をそそられるようになったといつてよい。臨床医として日常の診療において遭遇した患者の検査や治療と平行して、基礎的な研究にも興味をこめていた様子をうかがうことができる。Physician (臨床医) でありながら scientist (科学研究者) でもあつたガロッドの出発点がここにあるといふことができよう。